命(いのち)を芽吹(めぶ)かす

松下昌義

みちしるべライト

目次

一、いつもニコニコしていよう
一、人間とはなにか
一、せいては事を仕損じる
一、自分をみがく
一、自分は見えない
一、しあわせ
一、喜びのメガネ
一、みつめられている
一、川をわたる動物たち
一、すぐにあやまる
一、魂に安らぎをもつ
一、宗教とは
一、賢い人と馬鹿な人
一、信心と信仰
一、感謝の出来る人になろう
一、人間は罪人である
一、自分を美しくする方法
一、思い込み
一、孤独ではありません
一、福音
一、いつも　たえず
一、十字架
一、へりくだる
一、男と女
一、求める者は受ける
一、自分という人
一、命を芽吹かせよう
一、溺れてはならぬ

みちしるべライト

「自分のことばかりでなく，他人のことも考えなさい」　―聖書―

いつもニコニコしていよう

松下昌義

いつでもニコニコしていましょう。どんなことにも腹をたてないでいましょう。

わたしたちが、ニコニコしているとき、いちばん喜こんでいるのは誰れだと思いますか。

それは、あなたの内にある魂なのです。あなたの魂は、いつも、あなたがニコニコしていてほしいと思っているのです。

わたしたちが、腹をたてて怒っているとき、いちばん悲しんでいるのは誰れだと思いますか。

それは、あなたの内にある魂なのです。あなたの魂は、いつも、あなたが腹をたてて怒っているとき、悲しみ泣いているのです。

あなたの感情や知恵の理屈は、「ゆるせん」とか「怒るのはあたりまえだ」とか「いつもニコニコしてなどいられるか」と言います。

しかし、あなたの内なる魂は、そのようには思ってはいません。「ゆるしてやりなさい。そうすれば、あなたもゆるされます」と言うのです。「怒ると、あなた自身が汚れ、嫌な気分をあたりにまきちらし、喜こびが逃げだし、悲しみと不幸が近づいて来ますよ」、と言っています。

本当にそうだと私も思います。怒っているときの自分の顔を鏡にうつして見ると、目はつり上り、口はへの字に曲り、鼻の穴は大きく開き、顔は四角に角ばっています。

そんな人の周りからは、嬉しいこと、楽しいことの、すべてが逃げて行ってしまいます。そして、不幸なことが、汚いものにハエが臭つけて来るように集って来て、あなたを倒してしまいます。

そのことをよく知っているのが、あなたの内にある魂です。

あなたの内にある魂は、あなたがいつも喜こび、感謝し、ニコニコしていることを強く強く願っています。なぜならば、喜こび、感謝し、人をゆるし、腹をたてないなら、美しいところ、楽しいところに良いものが集って来るように、そのようなあなたのもとには、幸いなこと、よいことが来るからです。

「いつも喜こんでいなさい、どんなときにも感謝していなさい」、とイエスさまは教えて下さいましたが、これこそ自分を幸いにする秘訣です。

わたしたちの内なる魂を悲しませないようにしよう。

人間とはなにか？

○それは「つきあい」をする者

「人」のことを「人間」ともいいます。〝あの人は人間らしい人だ〟とか、〝わたしたちは人間的な行いをしなくてはならない〟、などと言いますが、その実、「人間」とは何か、とたずねられると、どのように答えてよいのか困ってしまいます。そこで、今日は「人間」ということを考えてみようと思います。

はじめに、「人間」という文字を注意深く見ますと、それは、「人」と「間」という文字から出来ていることに気がつきます。たしかに、私たちは毎日「人の間」にあって働いたり、勉強したり、遊んだりしている者です。

では、その「間」に何があるのでしょうか。そこには「つきあい」があるのです。そして、「つきあい」こそが、わたしたちに生きる喜びを与えてくれるものです。

○ひとりでは淋しくて生きられない

「つきあい」をする友だちがいなければ、わたしたちは淋しくて生きて行けません。どんな大きな家に住み、どれほどのお金や物を持っていても、ひとりぼっちでは淋しくて生きていけません。

なぜそうなのかと申しますと、それは神さまがそのようにお定めになったからだと、聖書のはじめにある創世記というところに記されてあります。

この神さまによる定めは、どんな人といえども無視したり、破ったりすることは出来ません。

○「つきあい」で大切なことは愛

「つきあい」で大事にしなくてはならないことは、自分のことだけを考えてはならない、ということです。

遊びに行って、いつでも友だちばかりにお金を出させて平気でいられるような人は、かならず、友だちを失ってしまいます。「自分のことしか考えないやつとは、もうつきあわない」と、誰れでもが思います。

わたしたちの「つきあい」に、相手のことを思ってあげる「愛」がなければ、つきあいは楽しくなくなり、つぶれてしまいます。

○「愛」をとりもどそう

わたしたちは、自分で気づかないうちに、自分勝手なことを言ったり、行ったりしてしまいます。そのとき、わたしたちは、「人の間」に生きる者としての「人間」であることを、自分から捨ててしまっているのだ、と言えます。

「わたしたちは、自分のことばかりでなく、他人のことも考えようではないか」という聖書のお言葉がありますが、これは、ただの教えでなくて、わたしたちが、人間らしい「人間」になるために忘れてはならない大切な心得であると言えます。

みちしるべライト

「自分のことだけでなく他人のことも考えなさい」―聖書―

自分は見えない

松下昌義

自分の悪いところに少しも気付かないで、あの人はどうだ、こうだと批判がましいことばかりを言う人がいます。

しかし、ひるがえって、かく言う私自身をみても同じような愚かな者であると思います。

考えてみると、わたしたちは、他人の顔は見えても、自分の顔は直接見ることは出来ません。いつも鏡に写し出した顔を、自分の顔だと信じて見ているにしかすぎないのです。

一生の間、わたしたちは自分の顔を直接に見ることなく死んでしまう者なのです。

他人のことが見えても、自分自身がよく見えないということは、わたしたちがもともとから持っている悲しい宿命のようなことなのかも知れません。

鏡に写し出された自分を見るとき、わたしたちは知らないうちに、自分に都合のよいように見ているようです。

同じ悪いことをしても、自分の場合は赦せても他人の場合は赦せないということがあります。

いつも自分自身を欲目で見、引いき目で考えてしまい、悪いのは常に自分でなく、あの人だ、この人だと思い込んでしまうということは、わたしたちがもともとからもっている弱さなのでしょう。

わたしたちはみんな、この悲しい宿命を背い、弱さを引きずって毎日生きている者です。

誰れも好きこのんでそのような生き方をしているのではなく、知らないうちに、気付かないうちにそのように生きているのです。

イエスさまは、そのようなわたしたちに、正しい人間になれ!!とお説教なさるのでなく、そのような弱さを引きずって生きている自分自身によく気付いて、「すみません、おゆるし下さい」と思う心を自分の内にもつとき、神さまはゆるして下さり、弱いわたしたちを助けて下さいます、と教えて下さるのです。

不幸とは、神さまに「すみません」と言えないことで「弱いわたし」のことではありません。

「すみません」と神さまに言える者は、本当に賢い人です。そんな人でありたいと思います。

しあわせ

○みんなしあわせを求めている

いつも、わたしたちは「しあわせ」を求めています。

そのためにいろいろと知恵をしぼり、努力し、一生懸命に働きます。また、神さまや仏さまにお祈りをささげたりします。

しかし、人によっては、自分の「しあわせ」を求めるあまり、他の人に迷惑をかけて、かえって自分のしあわせを失ってしまうという愚かなことをしてしまうことがあります。

では、どのようにすれば「しあわせ」になることが出来るのでしょうか。

○しあわせは「仕合せ」

しあわせということが、どこかにあるのではありません。

しあわせは、自分の内から生れてくる喜びなのです。

自分の内なる心や魂に喜びが広がるとき、わたしたちはしあわせを感じます。

では、心や魂の喜びはどのようにして生れて来るのでしょうか。

それは、「仕え合う」ことによってです。仕えるとは、相手のことを思うて何かをしてあげることです。

人と人とが互いに、相手のことを思うて仕え合うとき、そこに「仕合せ」が互の心と魂に生れ広がるのです。

このように「仕合せ」とは「仕え合う」ところに生れて来るのです。

○仕合せは思いやりの心

互いに相手のことを思うところに仕合せが生れて来ます。

自分だけのさいわいを願い、自分の思いをあげる思いやりの相手を誰ももっていない人は不幸です。

相手から求めるだけで、自分から与えることを知らない人の心はとても貧弱です。そのような人の魂は輝きを全く失い悲しみにうちふるえています。

思いやりもち、思いやりを受けることによって心は豊かになり、魂は光り輝き出すのです。

○仕合せは力と希望と感謝を生む

心と魂とが豊かになり光り輝くとき、苦しみや悲しみをおしのけ、のり越えて行く力と希望とが私達の内に生れて来ます。

ですから、仕合せな人は背すじをのばし、胸をはり、心を天に向けて毎日をすごすようになります。

「うれしいなあ」、「ありがたいなあ」と思う思いは、人の世を越えて、神さまのもとまでとどきます。その結果、その人は必ず神さまからお恵みが返って来て、ますます仕合せな日々をすごせるようになるにちがいありません。

みちしるべライト

「怒ることは、なるべくおそく」 ― 聖書 ―

せいては事を仕損じる

松下昌義

聖書にこんな話があります。

ある人が麦の種を畑にまきました。ところが、麦と一緒に毒麦が生えて来ました。おどろいたその人は、さっそく親方のところに行って言いました。

「親方、大変です。わたしは良い麦の種をまきましたのに、それにまじって毒麦が生えてきました。これからすぐに毒麦を抜きにまいります。」

これを聞いた親方は言いました。

「いや、待て、そんなことをしたら、良い麦まで抜いてしまうだろう。取り入れの時まで放っておけ。その時がきたら、はじめに毒麦を束ねて燃やし、あとで麦はきちんと倉に納めればよい。」

このお話を読んで、親方はえらい、と思いました。

わたしたちは、ときどき、目先の損得、良い悪いということで軽がるしく「これは得だ。」とか、「この人は悪い人だ。」とか決めてしまうことがあります。しかし、後になって、その判断が全く間違っており、悪いと思った人がとても良い人であったり、得だと思い込んだことがそうでなかった、ということがあります。

「もうすこしよく考えればよかった。」「もう少し待てばよかった。」などとくやしがったり、申しわけなく思ったりします。

先の親方は最後まで待ちなさい、と言いました。本当にそうだと思います。

でも、最後まで待つということは、とても大変な努力がいるものです。第一に忍耐、第二に愛情、第三に深い智慧、が必要です。

すぐに腹をたてたり、すぐに悪口を言ったり、よく考えもしないでことをおこしたりする人は結局、自分自身に苦しみを招くばかりか、周囲の人々を悲しませることになります。

しんぼうする人でありたいと思います。

相手のこころを包んであげられる人でありたいと思います。

又、よくよく考えることの出来る者でありたいと思います。

自分をみがく

○それは、自分を「研く」こと

だれでも、自分は美しくなりたい、立派になりたいと思っています。

どのようにすれば、美しくなり、立派になることが出来るのでしょうか。

たいていの人々は、自分を美しくしたり、立派にするには、自分の上に何かをつけ加えればよいのだ、と思い込んでいます。

しかし、それは、大まちがいです。

自分の上につけ加えたものは、ちょうどペンキを塗ったものがはげてしまうように、本当の美しさ、本当の立派さにはなりません。

上につけ加えるのではなくて、「研く」ことこそが、本当の美しさ・立派さを生み出すのです。

では、「研く」ということはどのようなことなのでしょうか。

○「研く」とは、すりへらすこと

「研く」ということは、自分をすりへらすことなのです。

ですから、台所の包丁を研ぐ、といいます。包丁が切れにくくなると、研石に包丁を当ててすりへらしますと包丁のさびが取れてよく切れるようになります。

また、宝石なども、はじめから光りかがやいている石ではなく、大地の中から堀り出されたときは、黒くてゴツゴツとしたものです。しかし、それをよくよく磨き、表面をすりへらしますと、光りかがやく宝石の自分を出してきます。ですから、「研く」という字には「石」がついているのです。

○「研く」とは、自分の良さと美しさを現わすこと

宝石は自分自身をすりへらして自分の美しさ立派さを現わし、人々を楽しませてくれます。

包丁は自分自身を研石に当ててすりへらして、よく切れる包丁としての用をはたします。

この道理は、わたしたちにも当てはまるのです。

美しくなりたいと思うならば、よく顔や身体を洗うことが基本的なことであります。

また、立派な人間になりたいと思うならば、多くの苦労を重ねねばなりません。

苦労することを嫌がる者は、研かない宝石、研がない包丁と同じであります。

結局、そのような人は、自分の本当の良さを出すことは出来ません。

どんな人にも神さまは、その人らしさの良さと美しさとを与えて下さっていると聖書に記してあります。

ある人を男とし女とし、ある人を農業をする人、大工さんとし、教師とし、政治家とし、家事をする人、事務をする人、タレントさんになる人……世間にはいろいろな人がいます。そこで人が自分自身を一生懸命に研くなら、その人は必ず自分を美しく立派に光り輝かすことが出来るにちがいありません。

みちしるべライト

「恐れることはありません。神さまを信じなさい」―聖書―

喜びのメガネ

松下昌義

赤色のメガネをかけてものを見ると、すべてが赤色に見えます。青色のメガネをかけてものを見るとすべてが青く見えます。

「そんなことあたりまえではないか」、とわたしたちは思います。

たしかに、私もそのように思います。

しかし、本当は青くも赤くもないものを、青く見たり、赤く見たりしてしまっては、「あたりまえ」ではすまされなくなってしまいます。

もしあなたが、美しい色彩の服を着て喜んでいるのに、それを赤色や青色のメガネをかけて見られたり、評価されたりしたならば、とても残念に思うにちがいありません。

「その色つきのメガネをはずして見てほしい」と思うでしょう。

色メガネをかけるのは目ばかりではありません。私たちは、自分の心に色メガネをかけることがあるのです。

もし、あなたが憎しみというメガネを心にかけて人やものを見るならば、すべてが「憎く」見えてしまいます。またあなたが「悲しみ」というメガネを心にかけて見るなら、すべてが悲しくつまらなく見えてしまいます。

しかし、あなたが「喜びと感謝」というメガネを心にかけて見るならば、すべてのことがありがたく見えるようになるでしょう。

「それは、そのとおりだと思うけれど…」とわたしたちは考えてしまいます。そして、自分の思い考えから一歩も出ようとしないで、「そんなこと言ったって」とか「現実はそんなにかんたんではないのだ」とか思い込んで、心にかけている色メガネを取りはずそうとはしません。

なぜ出来ないのでしょうか。その人の心が弱いからでしょうか。現実がきびしいからでしょうか。

そうではありません。その人の心に余裕がないからです。自分が色メガネをかけてものごとを見ていることに気がついていないからです。

「私があげるメガネをかけてごらん。安らぎと力と希望と喜びとが見えます」とイエスさまは申されます。

みつめられている

○みつめる

みつめるとは、じっと見入ることであり、目を注ぐということです。

みつめるのは、そのものに心や思いが引かれるからです。

お母さんは子どもをいつもいつもみつめながら育てます。それは自分の子どもに自分の心と思いとが引かれるからです。

みつめるとき、みつめている人の思いと心とが、みつめられている人の心の中に入って行きます。

みつめるということはすごいことだと思います。

○みつめられる

みつめるということはすごいことだと思いますが、みつめられるということはもっとすごいことのように思います。

子どもが身心ともに健康に育つのは、子どもが親をみつめているからということよりも、親にみつめられているからです。

親にみつめられることによって、子どもは親の温かい思いを心と身体に一ぱい注がれて、限りない安らぎを覚えるのです。そして、その安らぎが自分を育てる力となるのです。

○みつめられたい

わたしたちは、何かをみつめることによって力を得るということがありますが、むしろ、みつめられることによって一層大きな力と希望とが得られるのではないでしょうか。

「よくやったね」

「心配いりませんよ」

このような言葉や眼差しをみんな求めています。みんな、みつめられたいと願っているのです。

それは、他人によりかかろうとする人の甘えではなくて、わたしたちの根元にあるところの、人は決して一人だけで立つことは出来ない、という定めによるのです。

○本当の力と希望の基

みつめるということは自分からはじまり、みつめられるということは相手からはじまるのです。

表面的に考えると、みつめる人が強くて、みつめられる人の方は弱い人のように思います。

しかし、本当の強さはみつめられる人の中から生れて来るのです。

一人ぼっちで力んで力んで生きている人よりも、「守られているのです」「生かされているのです」と、自分がいつもみつめられていることを覚え感謝して生きている人の方が、どんな時にも強くあることが出来ます。

神さまを信ずるということは、神さまをみつめることではなくて、神さまにどのような時もみつめられている自分を知ることであります。

みちしるべライト

「恐れることはありません。神さまを信じなさい」ー聖書ー

川を渡る動物たち

松下昌義

動物たちが川の岸辺に集って向うの岸へ渡ろうとしています。だれかの合図で動物たちがいっせいに向う岸を目ざしてスタートしました。

川底に近い水の中を泳いで渡る魚、川の中くらいの深さのところを進む魚、川の表面に近いところを行くもの。一方、犬のような動物は、水面に頭だけを出して一生懸命に足で水をけって向う岸を目ざしています。また、足の長い動物は、川の底を一歩一歩ふみしめて歩いて渡ります。さらに、水面すれすれに飛んで渡る鳥もいますし、空高く飛んで川を下に見おろして渡って行く鳥もいます。やがて、全部の動物たちが川を渡り終えて向う岸に集りました。彼らは、みんなそれぞれに誇らしげに胸をはって言いました。「わたしは川を渡った」と。

どの動物も「わたしは川を渡った」と思い込んでいます。しかし、彼らは本当に川を渡ったのでしょうか。皆さんはどのように思われますか。

本当は、彼らは「川」の一部分を渡っただけなのです。なぜならば、川の底に足をどしんどしんとつけて渡った動物と川の表面に近いところをさらさらと泳いで渡った魚とでは、同じ川でも、彼らの見て感じた川は全くちがうでしょう。ましてや川の上を飛んで渡った鳥に於ては、水の中を泳いで渡ったものとは全くちがうだろうと思います。

一体どの動物が本当に「川を渡った」のでしょうか。彼らは川の一部分を渡ったにしかすぎないのに「わたしは川を渡り、川を知っている」と思い込んでいるのです。

わたしたちも人生という川を渡っている者です。しかし、わたしたちは、人生という川のほんの一部分を渡って知っているだけで、どのような人も、人生とはこのようなものだと自分で決めつけてはならないと思います。

私たちの人生は深く広く不思議に満ちています。イエスさまのお教えにより信仰の目をもって人生を見るとき、今まで見えなかった生きることのありがたさとすばらしさが見えてきます。

わたしたちの人生は愛に満ちた神さまとの出会いの場所であり、本当の自分の命の安心と希望と力とをいただけるところが人生という川なのです。

すぐにあやまる

○できない

どんな人間でも失敗をしますし、あやまちをおかします。

ところが、「しまった」と思っても「すみません」と言うことが、なかなか口に出て来ません。

それどころか、自分の失敗やあやまちをかくしたり、理くつをつけてべんかいしたり、さらに、うそをついてごまかしたりしようとします。ひどいときには、「おまえだってするではないか。何が悪いのだ」と文句をつけ怒り出す人さえいます。

私たちは、自分の失敗やあやまちを素直に認めることがなかなか出来ません。

○口で言う

「すみません」

「申しわけありません」

と、心から口に出して言える人は自分に幸いを招くことが出来る人です。

そのように言えない人の心は、ゴツゴツした暗い色をした石のようです。不満や愚痴、妬みの思いを内に持っていたり、とても傲慢で気位が高いので、素直に「すみません」と言えないのです。

「すみません」、という一言は、人の心に喜びを与えるだけでなく自分自身の心にも喜びの燈火をともすことになるのです。

○自分自身にも言う

「すみません」、というのは、自分以外の人に対してだけ言う言葉ではありません。それは、自分自身に対しても言う言葉なのです。

自分自身に対してとは、自分の内なる魂に対してということです。

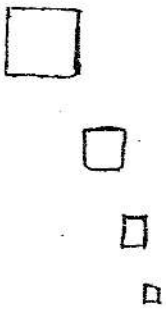
わたしたちが、誰かに対して傲慢な心でいるために、「すみません」と言わないとき、いちばん悲しんでいるのは、自分の内にいる魂です。

また、あやまちをおかして「すみません」とすぐに口に出して言うとき、いちばん喜んでいるのも、自分の内なる魂です。

私たちが、「すみません」と素直に言う度に、私たちの内なる魂は明るさを増し喜びに輝いていくのです。

ですから、何かの誤りをおかしたとき、たとえそれが誰も知らないとしても、わたしたちは自分の内なる魂に「すみません」と一言あやまることを忘れてはなりません。

自分の内なる魂への語りかけは、天の神さまに通じることなのです。



みちしるべライト

「悪口を言い合ってはなりません」 ―聖書―

魂に安らぎをもつ

松下昌義

「人はパンだけで生きる者ではない」、とイエスさまは言われました。

本当に、そのとおりだと思います。

人間は、ただ食べるだけでは肉体は満足しても、魂は満足しません。魂の満足や平安は食べることによって絶対に得ることは出来ません。

どのような人も、自分の内に魂をもっています。そして、どの人も、自分の魂が生き生きと光り輝くことを願っています。

魂が生き生きと光り輝いている人は、生命力にあふれています。顔の表情がとても明るくて、やさしさがただよい、接する人に安心を与えます。そして、その態度は落ちついて安定しています。それにひきかえ、魂がくもって暗くなってしまっている人の表情は、いつも不満を表し、その行いに安定がなく、接する人々に不快の念をまきちらすことになります。

どの人も、自分の魂を光り輝せて幸福で安心した生き方をしたいと願っているのに、なぜ、すべての人々がそのようになれないのでしょうか。

その理由はとてもかんたんなことです。一言でいえば、「思いちがい」をしていることによるのです。

自分の魂の平安を、ものを持つことによって自分に得ようとする「思いちがい」です。

たしかに「もの」は、わたしたちに満足や安心や喜こびを与えてくれます。しかし、それは自分の我による欲望の満足であって、決して自分の魂に満足を与えてはくれません。

自分の我による欲望は、「湯して塩水を飲む」の例えどおり、欲を満たせば満たすほど、欲はますます大きくなり、止まるところを知らず、その人の念は、光り輝くどころか、欲深くなるばかりで魂はかえって我欲で暗くなってしまうのです。事実、このようにして、身も魂も滅ぼしてしまった人々が世の中にはたくさんいらっしゃいます。

わたしたちの魂の輝きと平安は、魂の根っことである愛と真実の神さまにつながるときに、自然といただけるのです。「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実をならす」とイエスさまは教えて下さいました。

宗教とは

○なんだろうか

宗教って何んだろう。それは〝宗〟とすべきことを〝教〟えるものです。

〝宗〟ということは、〝心根〟であり〝生根〟のことだと言った方がいますが、それは、わたしたちが毎日の生活で、心の根っこととしてもっていなくてはならない教えということです。人が根性としてもっていなくてはならない教えといってもよいと思います。

○不幸な人

世の中には、とても心根、つまり根性の悪い人がいます。

高慢で他人を見下す人、自分勝手な人何ごともひがんで受けとる人、すぐに怒る人、そんな人は心根・根性・性根がまがっている人です。

心根も根性も性根も共にその人の一番大切な〝根っこ〟のところ、つまり〝宗〟のところなのです。

そのような人は悪い人なのでしょうか。いいえ、そうではなく、〝不幸な人〟だと言えます。

不幸な人とは、心の根っこのところに安心や喜びなどをもっていない人のことです。

どれほどお金や物をたくさん持っていても、また、社会的に高い地位についていても、その人の心の根っこに安心や喜びがないと、外面的は幸福そうに見えても、本当は不幸な人なのです。

このような人が、世の中にはたくさんいられるようです。

ですから、わたしたちが、よい心根をもつということは、とても大切なことです。

○よい心根をもつ

わたしたちが、よい心根を自分の内にもつためにはどのようにすればよいのでしょうか。

実は、心根というものは、自分でもとうと思ってもすぐに持てるものではないのです。

と申しますのは、心根というものは自分の内から生れて来るものだからです。

どのようにして生れて来るのでしょうか。それは、その人が喜びに出会えば喜びの心根がその人の内に生れ、平安に出会えば、平安の心根がその人の内に生れて来るのです。

その反対も同じです。人の悪口や、ものごとに文句ばかり言っている人に出会い交わっている人は、そのような心根がその人の内に生じて来ます。

イエスさまは、理屈ではなく神さまのご愛とお守りとを行いによってお示しになり、「心配いりませんよ」「安心なさい」と人々に下さいました。

こうして神さまのご愛に出会った人々の心根は、安心と喜びとの明るさに輝いたのです。

ありがたいことです。

みちしるべライト

「人が誘惑にかかるのは，欲にひかれるからだ」 ―聖書―

賢い人と馬鹿な人

松下昌義

インドのことわざに、「知恵のある人は、それが間違いであると気づけば、自分の意見を改める。しかし、おろかな者は、自分を押し通す」というのがあるそうです。

賢い人と馬鹿な人との違いはどこにあるのでしょうか。

それは、まちがったとき、素直にそのまちがいを認めることが出来る人であるか、出来ない人であるかの違いです。

自分の間違いを、素直に認める人は知恵がある人です。それに、ひきかえ、どのように言われても自分の間違いを認めようとしない人は馬鹿な人です。

いつまでも自分の考えを最も正しいとして、がんこにそれをもちつづけている人は、人間としての成長がありません。成長とは間違いだと気づいた自分を捨てるところにあるのです。

間違った自分を捨てるということは、誰でもなかなか出来ません。でも、人が成長して行くためには、どうしても必要なことなのです。

それは、わたしたちが大きく育って行くにつれて、そのときそのときに、小さくなった服や靴を脱ぎすてて行くのと同じです。

聖書に次のようなことばがあります。

「今日、あなたたちが神のお声を聞くなら、心をかたくなにしてはならない」

神の声とは、正しい教えということです。私たちは、正しい教えを聞いたなら、それを自分の生活の中に素直に取り入れましょう。

「聞くだけで終る者になってはいけません。聞くだけで行わない者がいれば、その人は生れつきの顔を鏡にうつして眺める人に似ています。鏡にうつった自分の姿を見ても、立ち去ると、それがどのようであったか、すぐ忘れてしまいます。しかし、正しい教えを見守る人は、聞いて忘れてしまう人ではなく、行う人です。このような人は、その行いによって幸せになります」（ヤコブの手紙一・二二）

聖書に「悔改」という大切な言葉がありますが、それは、自分の考えにこりかたまっている心や思を、神さまの方に向きを変えることを言った言葉です。新しい自分をつくるために悔改に素直でありたいと思います。

信心と信仰

○それは同じではない

わたしたちは、「信心」と「信仰」とを同じだと思っています。

「あの人は信心深い人だ」というのと「あの人は信仰深い人だ」ということとは、同じことだと思っています。

しかし、それは同じではありません。それどころか、それらは西と東ほどのちがいがあるのです。

○信心とは

聖書では、「信心」と「信仰」を、はっきりと分けているようです。

神さまに対する敬いの心と態度のことを「信心」と言っています。

このことは、信心という漢字にも表れているようです。

つまり、「信心」とは「信ずる心」ということです。そして、この文字から受ける感じは、とても強い心のようです。

「私が信ずる心」と読むと、何かひとり力んでいる人の姿を連想してしまいます。はりきるのはよいのですが、ついつい虚勢をはって、いばって他を見下してしまいかねない様子を感じます。

「私は正しいのだ」という思いは、つい、「お前のような者ではない」から、「お前などだめだ!!」となりかねません。

このように一見「信心」は立派に思えるのですが、その実、とても強い「我」がその根本にあります。

ですから、信心からは「とめどもないいがみあいが生れて来る」と聖書は教えています。(第一テモテ六・五)

○信仰とは

信心にくらべて「信仰」という漢字は素直な思いがします。「信じて仰ぐ」というのですから、そこには力んでいる様子がありません。

天からふりそそぐ光りを受け、手を合せて感謝している姿を想いうかべます。

自分が自分がという思いではなく、神さまがこんな私をもお守り下さってありがとうございます、という深い感謝、よろしくお願いしますという深い信頼の思い、に安心している姿が「信仰」ということなのです。

聖書が言う「信仰」もこれと同じです。それは、神さまのご愛とお導きとを信頼する真ごころのことなのです。

○本当に強い人

信仰に生きる者は、自分の信念、自分の思い込み、自分の確信により頼んで生きるのではありません。

神さまのご愛を自分の支えとして生きる者が信仰の人です。

神さまの命を自分の命としていただいて永遠に生きつづけるのが信仰の人です。人生の最後に勝利する本当に強い人は信仰の人なのです。

みちしるべライト

「すべてのことに感謝しなさい」―聖書―

感謝の出来る人になろう

松下昌義

あるとき、不治の病で苦しんでいる十人の人がイエスさまにお願いして、元気にして頂いたのですが、あまりの嬉しさに小躍りしながら街中に走って行ってしまいました。ところが、そのうちの一人の人は、はたと我にかえり、自分がイエスさまにお礼を言っていないことに気づいて、急いでとって帰り、「ありがとうございました」と感謝しました。そのとき、イエスさまは、その一人の人に言われました。「神さまに感謝するために帰って来たのは、あなた一人だけですか。さあ、立ち上がって行きなさい。あなたの信仰があなたを救ったのです」と。（ルカ福音書一七章）

私たちも毎日の生活のなかで「ありがとうございます」と言うことを、ときとして忘れてしまいます。ですから、私は自分自身に「どんなことにも感謝することを忘れるな」と、言い聞かせることにしています。

なぜそのように自分に言い聞かせているのかと申しますと、感謝を忘れてしまうということは、自分の思いにおぼれてしまって、他のものが見えなくなってしまうからです。

先に、元気にしてもらった十人の人達は、自分の病気が治ったという自分の喜びに溺れてしまって、イエスさまに感謝することを忘れてしまったのです。しかし、ただ一人だけが、自分の喜びに三分が溺れてしまっているのに気付き、「ありがとうございました」と、お礼をするために帰ってきました。そのときイエスさまはその人に「あなたの信仰があなたを救った」と言われましたが、それは、「あなたの真の心が、あなたの体と魂とを神さまに連なる健康な人としたのです」と言われたのです。

お礼を言ったり、頭を下げたりすることをしない人は、自分自身を傷めつけている人なのです。ましてや、憎しみや傲慢な心のゆえに感謝をしない人はなおさらです。「ありがとうございます」という一言は、自分自身の体と魂とを神さまに結びつけ、人として自分を育てる、最も手じかな方法なのであります。

そのような生活によってこそ、イエスさまのお言葉の有り難さが理解できるようになり、さらに神さまの、わが身へのご愛を感じることが出来るようになるのです。

人は「罪人」である

○それは「四つのねじけ心」

漢字で「罪」とは、「四つの非」と書きますが、その「非」という字は「よこしま」とも読まれると字典にありました。「よこしま」ということは、御存知のとおり「正しくないこと」「こころがねじけているさま」ということであります。

とすると、「罪」という字は「もともと真っ直ぐで正しいはずの心が、四つのねじけ心になった状態」を表したものであるといえます。

その、ねじけ心を、「我痴」「我見」「我慢」「我愛」のことであるとするならば、なるほど、人はみんな「罪人」であると聖書のいうことがうなずけます。

では、「我痴」とはどういうことかともうしますと、私たちは、自分がどういう者であるかということを、よく知っていない、ということです。

次に、「我見」とは、自分の考えはこうなのだ、と自分の思いに止まり、他の人の意見に耳を傾けようとしないことです。

「我慢」とは、傲慢な心をもって他人を見下すことです。

「我愛」とは、自分のことばかり考えて、他人さまのことを考えようとしないことです。

○罪人とは自分のこと

このように、四つの罪について思いめぐらすとき、私たちは、つい、「○○さん」のこと「××さん」の姿を思いうかべて、自分自身には関係ないことのように考えてしまいます。それでは「罪」ということを本当に考えたことにはなりません。

イエスさまは、どんなときにも、罪についての説明はなさいませんでした。

また、どんな時にも、「あの人、この人の罪」とは言わずに、いつも『あなたの罪』と言われました。じつに、罪とは「自分のこと」「我が身のこと」なのです。

○神さまに対する罪

新約聖書が用いる「罪」という言葉は「的を射はずす」という意味に用いられたそうです。とすると、罪とは、私たちの欠点とか弱さではなくて、私の生き方そのものが的を得ていない、ということになります。「おまえのしている事は的を得ていない」と言われることは「いくら努力してもだめだ」ということです。

何に対して的を得ていないのでしょうか。イエスさまは、「神さまの慈愛に対してである」と言われます。どの人も神さまに守られて毎日生かされているにもかかわらず、感謝するどころか、「そんなことはない、私は自分の力で生きているのだ」と、思い上がった考えをもって日々過ごしています。

「神から神のものを奪い、人から人のものを奪う、恐るべき自分中心の生き方」をしているのが「私の罪」なのです。

この「私の罪」から人が救われなければ、人の世界に本当の幸福は来ないとイエスさまは教えて下さいました。

みちしるべライト

「自分を過大に評価してはなりません」 ― 聖書 ―

自分を美しくする方法

松下昌義

誰でも自分を美しくしたいと思っています。そのために、女の人は化粧をし、服装や髪型を工夫したり体型を整えることに熱心になります。また、自分の顔や姿を一日に何度も鏡にうつして、自分を調べます。これは、男の人も同じです。

このように、自分を美しくするために努力することは、とても良いことであり、そのように、自分の姿について気をつかう者だけが美しさを保つことが出来るのです。

自分の美しさを作るのに二つの方法があります。一つは、外側から美しくする方法です。もう一つの方法は、内側から美しくすることです。

化粧をすること、髪型や服装を工夫すること、体型をととのえることなどは外側から美しくすることです。多くの人は、この方法だけで自分を美しくしようと思っています。しかし、これだけでは、本当の美しい自分になることはできません。本当の美しさというものは、いつまでも飽きることがない美しさです。見れば見るほど楽しくなり関れば関るほど喜びが増し、安らぎと力が与えられるものです。

このような美しさを持っている人に時々出会うことがあります。その人は必ず皆から愛され尊敬を受けています。

では、そのような美しい人になるためにはどうすればよいのでしょうか。その方法は、内側から自分を美しくしようと努力することです。

どんな時にも腹をたてないこと。憎まないこと。悪口を慎むこと。いつも笑っていること。喜びを何処でも見出すこと。有り難うございますという感謝の言葉を言うこと。それに、鏡に自分を写したとき最も楽しい顔を作りながら、この顔でいつもいようね、と語りかけること。とにかく、自分の心（魂）をいつも美しく磨いていると、それが外側に出てきて、飽きない美しさを持つ自分となるのです。聖書は私たちがそのような美しい者となる秘訣を示しています。

「あなたがたの装いは、金の飾りや、派手な衣服といった外面的なものではなく、むしろ、柔和でしとやかな気立てという朽ちないもので飾られた、内面的な人柄であるべきです。このような装いこそ、神と人の前で価値があるのです。」

―ペテロの手紙一3：3―

思い込み

○それは自分勝手な思い

「思い込み」ということは、自分の心の深いところで、そうだと固く思ってしまうことです。

「あばたもえくぼ」ということも思い込みのひとつです。本当は「あばた」なのに、それを「えくぼ」と固く思ってしまう。そのように思い込んでしまうと、誰がどのように説明しても、自分の誤りを認めようとしません。

思い込みの恐ろしさは、自分の思いに自分が縛られてしまうところにあります。

誰も、その人のことを馬鹿にしてはいないのに、自分は人から馬鹿にされている、と思い込んで、勝手に一人で悩み苦しんでいる人がいます。また、その人の実際の人柄を見もせず知ることもしないで、「悪い人だ」「良い人だ」と思い込んでいる場合もあります。このように、自分勝手な思いが思い込みということです。

○それは恐ろしいこと

思い込みの恐ろしさは、自分の勝手な思いで自分を縛ってしまうだけでなく、相手をも縛ってしまい、結局、本当のことが分からなくなってしまうことです。

例えば、桜の花は春に咲くと思い込んでいる人には、夏に咲く桜の樹は「変な樹」「桜でない樹」のように思うかも知れません。「桜の花は春に咲く」という思い込みが、その人を捕らえ、桜の樹を捕らえてしまっているので、夏に咲く桜の樹は「変な樹」になってしまうのです。

思い込みがこの程度のことなら、べつに問題はないのですが。それが、人の生き方や考え方に及んでくると、とても恐ろしいことになってしまいます。

うわさからくる思い込み、教えからくる思い込み、気分からくる思い込み、憎しみや嫉妬からくる思い込み、外見からくる思い込み、社会的地位や名誉からくる思い込み、はては、皮膚や目の色からくる思い込み、実に数え上げればきりがありません。

○それは誰もが持っている

思い込みはどのような人も持っています。なぜなら、私たちはすべてのことの本当の姿を知っている者ではないからです。自分の考えや思い、知識や経験も限られたものです。

○だから謙遜こそ大切

思い込みから少しでも解き放たれる秘訣は「謙遜」を身に付けることです。イエスさまは、自分も他人もすべてのことを、神さまにお委ねして、安心していなさいと言って下さいました。そのとき、目の前のことを素直に受け取ることができるようになるのです。

みちしるべライト

「いつも喜んでいなさい」　―聖書―

いつも、たえず

松下昌義

なにごとでも、「続ける」ということは、とても大切です。

続ける、とは、切ることなく、つないで行うことです。

岩の上に落ちる、ひと雫の水でも、何年、何十年、何百年と続くあいだに、岩に穴を彫ることをわたしたちは知っています。

一つのことを、何十年も続けている人が言いました。「頭が覚えるのではないんです。続けていると、少しづつ、身体に滲み込んで来るのですね、一時的に頭で覚えたものは、すぐ忘れてしまいますよ。でも、時間をかけて、身体に滲み込ませたものは、忘れようと思っても、捨てようと思ってもそれはできませんね。えらいもんですわ」

続けることは力である。という言葉がありますが、たしかに、何ごとでも、続けていると、それは自分の中で力となって、ひとりでに動きだすようになります。

「習性となる」ということわざがありますが、これは、「これ、乃の不義なる習い、性となれり」ということで、正しくない生活を続けているとそれが、あなたの身に滲み込んで、すっかり、そのような人になってしまう。ということです。

聖書は、続けることの大切さを、くりかえし教えています。

「いつも喜んでいなさい。たえず祈っていなさい。どんなことにも感謝してなさい。…これこそ神があなたがたに望んでおられることです。……すべてを吟味して、良いものを大事にしなさい。あらゆる悪いものから遠ざかりなさい」

―第一テサロニケ五章一六節―

これは、型にはまったかたぐるしい教えではありません。自分を造りあげて行く、最も身近な方法なのです。

自分の勝手な気分で、喜んだり感謝したり、祈るのではなく、いつも、たえず、喜びと感謝と祈りごころをもって生活していますと、必ず、そのような感覚をもつ自分が、自分でも知らない間に造られてしまうのです。そのとき、自分も人をも幸いに出来、神にも受け入れられる者となります。天に於いても通用するのはそのような者だと思います。

十字架

○それは死刑執行の刑具

十字架につける、ということは、昔ローマの最も厳しい処刑の方法でありました。

イエスさまは、熱狂的な当時の宗教家や政治家といった権力者によって、その教えるところが、自分たちの主義に反するという理由で、神の正義の名によって恐ろしい十字架につけられたのです。

○十字架のうえで

イエスさまは、恐ろしい十字架刑からできれば逃れたいと思われました。しかし、「それが、私に与えられた、神様の御旨であるならば、お受けいたします」と、血のしたたるような汗を大地に流し一晩中お祈りになりました。そして遂に、ご自分を十字架にのぼらせられたのです。

そして、苦しみの中で、「神よ彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです」と、敵のためにお祈りになりました。最後に、「神よ、わたしの霊をあなたにお委ねいたします」と言葉して、息絶えたもうたのです。

このありさまを、つぶさに見ていたローマの処刑隊長は、「このお方こそ、まことに、神の御子であった」、と言いました。

○それは神と人とを結ぶ

どこの教会にも、十字架が掲げられています。それは、何を示しているのでしょうか。

十字架の縦の棒は、天と地とが繋がったことを示しています。私たちは地にはいつくばって生きています。人の世は、御存知のとおり、罪に満ちています。そこには、本当の救いが見当たりません。いっぽう、天は神の御座です。そこは光りの世界、平和、幸福の座です。ですから、私たちが天を仰ぐと、気持ちが大きくなり、心が落ち着くのです。しかし、地に住む私たちには、天は遠く、ただ仰ぐだけのかけ離れた処です。しかし、イエスさまの十字架は、天と地、神と人とを結び合わせましたよ、という神の愛と恵みを知らせる神の言葉なのです。

○それは人と人とを結ぶ

十字架の横の棒は、人と人との繋がりを示します。みんな、赦し合いましょう助け合いましょう。ということです。

○十字架の真ん中に生きる

縦、それは神と人。横、それは人と人。その何れでも、人は良く生きられません。

良い生き方とは、神さまとの和を保ちつつ、人との和に生きる者です。イエスさまは、そこに生きることを、私たちに身をもって与えて下さったのです。

真の安心の証こそ、十字架なのです。

みちしるべライト

「神はへりくだる者に恵みを与えられる」　―聖書―

へりくだる

松下昌義

「豚に真珠」という諺があります。その意味は値打ちの分からない者に宝物をやっても無意味である、ということです。その他、「猫に小判」とか「犬に論語」とか言われるのも、同じような意味です。

これと似たような意味の諺に「馬の耳に念仏」というのがあります。それは、いくら善いことを説いても、一向に通じない、受け入れない、きき めがないことを言った言葉です。「どこふく風」と聞きながされた。とか、「馬耳東風」だった。などというのもあります。

とにかく、出来うることなら、このような愚かな者にはなりたくないなあ、と思います。

せっかく、よい人、よいもの、よいことがらに出会っていながら、その「すばらしさ」がよく分からない為に、その機会を無駄に失ってしまうということは、自分の人生にとって大損失です。

私自身、今振り返ってみても、「あのとき、もっと、あの方が語っておられた言葉に、真剣に耳を傾けておけばよかった」と、悔恨の思いをいだくことが多くあります。

あまりにも、自分が傲慢だったために、あまりにも、自分が狭く小さな考えしかもっていなかったために。あまりにも、自分がこの世にとらわれ現実的な考えしか持っていなかったために。あまりにも、自分が一つの考えに固執していたがために。……という思いがこみあげてきます。

聖書は、私たちに「へりくだる」ことを教えています。「へりくだる」とは、謙虚になること、ごうまんにならず、謙遜でいることです。

「へりくだる者は誉れをうる」、「神はへりくだる者に恵みを与えられる」、「神はへりくだる者を勝利をもって飾られる」、「へりくだる者には知恵がある」。本当にそうだと思います。

へりくだる時、必ず、自分の世界が大きく、深く、広くなります。今まで生きてきた世界では見ることが出来なかった、素晴らしい世界が見えてきます。そして、最後に、神さまの愛と誠とが見え、喜びと感謝と希望とをもって、今までとは違った自分の人生を生きる者となるでしょう。

注―「豚に真珠」とは、聖書マタイ七章六節による―

男と女

○なぜ男と女か

私たちは、男であるか、それとも女であるか、そのいづれかの者として生きています。

「そんなこと、当たり前ではないか」と言う方があるでしょうが、よく考えてみると、それはとても不思議なことです。

なぜ、私は男なのでしょうか。なぜ私は女なのでしょうか、そもそも、なぜ人間には男と女がいるのでしょうか。

答えは、とても簡単明瞭です。神さまがそのように人間をお創造りになられたのです。

○男の為の女、女の為の男ではない

この世に在るどのようなものも、ただボヤーと在るのではなく、ある役割を果たしており、それなりに理由があって在るのです。

ところが、人間は欲が深く、自分中心に何でも考えますから、「自分のためにならないもの」は、すべて「つまらないもの」と決めつけてしまいます。

男と女についても、男達は、「女は男の為にある」と思い、女達は「男は女のためにある」と、自分勝手な欲深い考えで思っているのかもしれません。

その考えは間違っています。

○性があるから

男と女の間には「性」が常にその間にはさまってあります。ですから、「自分のためだけ」という、自分中心の欲で関わりますと、他の何よりも、人間の醜い地獄のような姿が現れてきます。

○なぜ男と女はあるのか

人間を男と女に神さまが創造られたということには、とても大切な意味があるのです。それを、よく知るためには、私たちは、自分の欲、自分中心の考えで男や女を見たり、関わったりする態度をすてなければなりません。

「この世のすべてのものは、それだけでは在ることが出来ない」ということと、「すべては、愛という、関わりによって在るのだ」ということを、最も身近な事として、人間が自覚できるためにあるのが、男と女との関わりなのです。

何事においてもそうですが、特に男と女の関わりは、「自分のことだけ」を考えると、必ず、その関係はつぶれてしまいます。どのような情熱的で美しい愛にみえても「自分のため」であるならば、必ず、破綻が生じるのが男と女との関わりです。

男と女の存在は、人が人に対し、また、人がものごとに対してどのように関わることが大切であるかということを、私たちに最も身近なこととして神さまがお示しくださった恵みなのです。

みちしるべライト

「素直な心で神を求めよ」　―聖書―

求める者は受ける

松下昌義

「求めなさい。そうすれば、あたえられる。探しなさい。そうすれば、みつかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。だれでも、求める者は受け、探すものは見つけ、門をたたく者はひらかれる」　―新約聖書マタイ七章七節―

これは、とても、あり難いお言葉だと思います。わたしたちが、「求め」「探し」「叩く」その分だけ、必ず答えられるといわれるのです。自分が努力した分だけ、必ず答えられるということほど有り難いことはありません。

努力しないでも答えられる、というのは、やさしさでも、親切でも、愛でもありません。

イエスさまは愛のお方であると聖書は語っていますが、それは、なんでも相手の言いなりになって、その求めに安易に答え、相手の望みどおりにふるまわれたのではありません。

イエスさまはそんな甘ったれた神の愛をお説きにはなりませんでした。

「必ず与えて下さる」から「熱心にもとめよ」と、イエスさまは言われるのです。「必ず見出す」から「努力して探せ」といわれる。「必ず開けてもらえる」から「必死になってたたきつづけ」と言われるのです。

わたしたちは今、ひとりで立って歩いている。しかし、初めからこのように歩けたのではありません。かつて、必死の思いで首を持ち上げ、全身の力をふりしぼって寝返りをうち、歯をくいしばって這い、何度も失敗を繰り返して立ち上がり、転びながら歩くことによって、今ここに恵まれた自分がいるのです。

立ちあがる力が神さまから与えられていたので私たちは努力することによって立ち上がることが出来たのです。歩く力が与えられていたので、歩こうとする努力が実り、いま歩くことが出来ているのです。そこに神さまの恵みがあるのです。

私たちは、どのような時にも、決して失望しなくてよい。いつも、自分を豊かに成長させたいと願い、努力する気がまえを神さまの前に持ち続けていたいと思う。「求める者は受ける」とある。これこそ、本当の恵みではないでしょうか。この言葉は私を、限り無く力づけ、喜びと希望にひきあげてくれます。

自分という人

○不思議な自分

だれでも日に一度ぐらいは、自分を鏡にうつして見るにちがいありません。

そのとき、私たちは、そこに写っている自分を、そのまま自分だと思って見ているので、自分の不思議さが見えてきません。

しかし、鏡に写った自分を、あたかも他人を見るような思いで眺めてみると、今まで見えなかった自分、気付かなかった自分の姿が見えてきます。

「いったい、お前は誰だ」と、鏡の中にいる自分という人に語りかけてみるとその人は、急にとまどいはじめます。

「お前は、いったい、どういう者なのだ」とたずねてみますと、その者は、とても困った顔をして、しばらく黙っててちらを眺めていますが、最後に「分からない」と、言い出します。

「おまえは、善人か、それとも悪人なのか、言ってみなさい」と、尋ねても「分からない」というでしょう。また、「おまえは、何処から来たのか」と、尋ねても、やはり「分からない」というような顔をするでしょう。

私という人は、とても不思議な者なのです。

○可哀そうな自分

自分という人は、強そうに見えても、その実、とても弱い人なのです。

だいいち、自分が何処から来た者かもよく知らないし、はたして、自分が何者であるかも知らないのです。

おそらく、なんのために生きているのかということを尋ねても、まともな答えなど出来ないだろうとおもいます。

彼は、何の拠り所ももっていない可哀そうなものなのです。

○安心の語りかけをしてやる

自分という人と、いつも馴れ合いで付き合っているので、自分と言う人の本当の姿が分からないのです。

鏡の向こうに自分という人を突き放して、物を見るように眺めて見ますと自分という人が、どれほど不安定な心の状態で生きているかが、よく見えてきます。早く安心させてあげたいとおもいます。

私たちは、そのような自分に、きっぱりと、次のように語ってあげましょう。

「安心しなさい、あなたは、神さまの愛に包まれ支えられている素晴らしい自分なのです。そのような自分に気付きましょう。神さまがあなたをこの世におくりだしてくださり、今、生かしてくださっているのです。この世のつとめが終わるとき、神さまのもとに帰っていきます。喜びましょう、感謝しましょう」

みちしるべライト

神よ，あなたは何でもおできになります　―イエスの祈り―

命を芽吹かせよう

松下昌義

「あなたがたの中で智恵の欠けている人がいれば、誰にでも惜しみなくとがめだてしないでお与えになる神に願いなさい。そうすれば、与えられます。いささかも疑わず、信仰をもって願いなさい。疑う者は、風に吹かれて揺れ動く海の波に似ています。そういう人は、神からなにかをいただけると思ってはなりません。心がさ定まらず、生き方全体に安定を欠く人です」（ヤコブ1・5）

どのような人も、自分の内に偉大な能力を秘めています。神さまは等しくその能力を下さっています。しかし、それを、よく育てる人と潰してしまう人とがいます。大地に種を蒔いたときのことを思い出してください。上手に育てることの出来る人は、種が内に秘めている命の力を芽吹かせることができます。しかし、智恵なき人は、種が内に秘めている命を枯らしてまい、結局、何も自分のものに出来ずに終わります。

どのような人も、先ず、自分の内に神さまから与えられた、偉大な命の種を持っていることに気付かねばなりません。そして、それに対して深い感謝と強い尊敬の思いをいだくことです。

「私は、神さまから、偉大な命を与えられている者です。ありがとうございます」

という確かな確信と深い感謝の思いを自分の内にみなぎらすとき、その人は、この世にのみ囚われていた自分自身を解放して、神さまの方に自分を向かわせたことになるのです。そのときから、例えば、聖書の言葉やそこで語っておられるイエスさまの言葉の真実が、自分にとって身近なものとなり、それを聞き、栄養となし、内にある偉大な命の種を芽吹かせる働きを自覚できるようになるのです。

「わたしの内で、今までとはまったく違った喜びと力とが動きだした」と、驚きと期待とをもって強く感じるようになってくるのです。

しかし、自分の外のものに自分の関心のすべてを向け、ただ見ること、聞くこと、味わうこと、触れることの感覚の満足を求め、噂ばなしと文句と疑いの心に自分が支配されている者は、結局、自分自身の暗い思いと愚かさで、折角の内に持っている偉大な命の種を枯らしてしまうことになってしまいます。神さまから与えられている、私たちの内にある偉大なる命は、芽吹き光り輝くことを待っています。

溺(おぼ)れてはならぬ

○溺れる

溺(おぼ)れる、と言うことは、水などに沈むこと、物事に心を奪われること、むちゃくちゃになること……などと辞書に説明してあります。

溺れるのは、水の中だけのできごとではなく、私たちの生活のすべての処でおこることです。

「○○は女に溺れた」「○○は賭事(かけごと)に溺れてしまった」ということは、よく聞く話です。

○それは楽しみだけを求めること

人がなにかに溺れるのは、それが自分にとって楽しい事だからです。ところがその楽しさを自分が味わいつくそうとするとき、その人は、それに溺れてしまうのです。そのことに、自分をどっぷりと沈めてしまうと、自分もそれもまったく見えなくなってしまうのです。そして、ただ自分だけの感覚的な楽しみだけを楽しむ、という、極めてひとりよがりで独善的な姿になり、人々に迷惑をばらまくということになります。そのような人は政治の世界、宗教の世界、学問の世界など世間のどこにでもおられるようです。

○よく消化しょう

物を食べるとき、美味しいからといって、美味しさのみを楽しんでどんどん食べると、消化不良を起こして、なんら身につくことなく下痢をして身体をいためてしまいます。すべてものごとはこれと同じです。

感覚的な楽しさだけの満足を求めて物事に関わってはなりません。大切なことは、それを自分でよく消化することです。消化するということは、自分の魂を豊かにする栄養とすることです。つまり、本当に自分自身の心魂の健康の為に作用するものとなるようにしなくてはならない、ということです。

○ただでは起きない

転んでもただでは起きない、という言葉は悪い意味で使われることがありますが、ことでは善い意味に理解して、どのようなことを自分が経験しても、そこから、必ず自分の魂を豊かにするような何かをつかもうとすることです。

そのためには、自分が経験した楽しみも苦しみも悲しみも、それはいったい何であったのかということを自分に明らかにしょうとする、静かな時を生活の中にもつことが大切です。

私たちが常にそのような態度でものごとに関わる習慣を身につけるとき、私たちの物事を見る能力が知らない間に育てられ、自分をとりまくすべての事柄から出来事が秘めていた自分にとっての本当の意味を知ることが出来るようになり、私たちを大きく成長させることができるようになります。

あとがき

この冊子は，「みちしるべライト」の一部を纏めたものです。どこででも手軽に読めるものとして生まれたのが「みちしるべライト」でした。幸い，お読み下さった方々が喜んでいただき，現在も発行させていただいておりますが，この度，その一部を冊子として作り，「みちしるべ文庫」に加えられることになり，より多くの方々とご一緒できれば有り難いことだとおもいます。

なお，この冊子はご覧のとおり手づくりです。教友の山本哲也氏の労によって成ったものです。感謝いたします。

一九九三年七月　　松下昌義

第四刷の後書き

多くの方々の要望により第四刷を発行できますことは有り難いことです。

第四刷の冊子の製作は教会「姉妹の会」の有志の方々の手作り奉仕によって完成致しました。ご協力下さった方々に深く感謝致しますとともに、この冊子が神さまの栄光をあらわす業に少しでもお役に立てば幸いであります。

二〇〇〇年十月　　松下昌義

みちしるべ文庫　8
「命を芽吹かす」
一九九三年七月一日　第一刷発行
二〇〇〇年十月二日　第四刷発行
著　者　松　下　昌　義
発行所　左京キリスト教会出版部
京都市左京区下鴨南茶ノ木町二九
電話（075）781-9640